

対談・『国境の南、太陽の西』 (I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 英行, 高野, 圭子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006694

対談・『国境の南、太陽の西』(I)

酒井 英行
高野 圭子

Ⅰ 「奥さん、これ忘れ物ですよ」

酒井 それではこれから、村上春樹の『国境の南、太陽の西』の対談を始めたいと思います。この作品の終りのほうに、「奥さん、これ忘れ物ですよ」という、有紀子の印象的な台詞があるんですけど、先ず、最初に、「忘れ物」ってことについて、考えるところから、対談を始めたいと思います。この辺は、まあ、あまり頑張って話しちゃうと、作品のテーマというか、全体を読むことになつて、ここから入るっていうのは、ちょっと怖い入り方ではあるんですけども。作品の結末部の有紀子、……。この、有紀子が、急に、春樹作品によくある、その、女性の登場人物が、急に、パワーアップというか、……。たとえば、『羊をめぐる冒険』の、耳の彼女とか、ある意味、超越者になるように、有紀子が、結末の辺で、ちょっとパワーアップして、さっき言った『羊をめぐる冒険』の耳の女の子のような女性に、

変身するっていうことがあって。で、この、結末の有紀子について話してみたいと思いますけども。有紀子が、「私も昔は夢のようなものがあつたし、幻想のようなものもあつたの。でもいつか、どこかでそういうものは消えてしまったのね。」って言って。それで、さっきの、自分の捨てたものに、夢の中で、何度も何度も、追っかけられる。自分の捨てたものに、追っかけられて、誰かが、その、捨てたものを抱えてきて、「奥さん、これ忘れ物ですよ」って言う。私には、印象的なシーンなんですけども。この「忘れ物」って言うのは、高野さん、何だと思えますか？ ちよつと、ストレートな聞き方ですけど、……、何なのでしょう、これは？

高野 有紀子の言葉に、「私にも昔は夢のようなものがあつたし、幻想のようなものもあつた」って言うのがありますよね。そして、「でも、それを、捨てて来た」と言っています。生きていくということや、大人になるっていうことで、かつてはとても大事に思っていて、自分にとってかけがえの無いものだって思って、自分の内側に抱きしめていたようなものを、捨て去るといふか、……、断念する、ということがある。たぶん、誰にでも。自分にも、確かにあつた。それを、始君は、「悲しくて悲しくて仕方ない」って言うわけですよね。そういう始君に対して、私だって、おんなじなんだよって、あなただけじゃないって、有紀子は、言っているんだと思います。それでも、生きてきた、生きていくんだよって、始に、教え諭している（笑い）。先生が、有紀子が、パワーアップするって、おっしゃいましたけど、ほんと、そういう感じですね。ここにきて、彼女は、今、立ち止まってしまっている始を、引き上げるといふか、再び動き出すよう、背中を押すといふか、そういう役割をしているんじゃないでしょうか。

酒井 つまり、この、有紀子が言っている、「夢のようなもの」、「幻想のようなもの」って言うのは、我々人間が、成長するときに、必ず、捨て去るべきもの、……。捨て去るっていうことが、大人になるということ。主人公の始君は、

それを捨て去らないところが、幼児性というか、子供性を引きずっているということ。有紀子が言っていることは、成長の秘儀っていうか、捨てるべきものだっていうか、つまり、失うべきもの、持っていないといけないものだというふうには、とらえるのか、……。まだ持っているということ、肯定的にとらえるのか、つてのが、ちょっと、私、わからないところなんですけど。

高野

よく、春樹は、記憶っていうものを、小説のテーマにしますが、これも、まさしく、そうですね。記憶って、人間にとつて、ほんとに重要っていうか、人間そのものだなって、春樹の作品を読むと思います。あの、人が、オギャーと生まれてから、毎日毎日、時間を積み重ねることで、齢をとつていって、それが、生きていくつていうことで。私たちは、それを、人生と呼んで、そして、記憶として保存するんですよ。あの、私にも、高校とか、大学のときとか、二十歳ぐらいのころに、絶対、今日の話は、一生忘れないだろうなって、思う出来事がありました。その時、着ていた洋服とか、食べたものとか、見た気色とか、もちろん、その時の自分の感情とか、忘れることは決してないだろうと、思っていたんです。それは、確信でしたし、実感だったんですよ。ほんとに、無邪気に、そう思うことができた。でも、今、どうなのかと言えば、全然覚えていないんです、あつけないほど（笑い）。そういうことがあった、という時系列上の出来事としては、記憶にあるし、あのとき、私は、あんなだったつて、思いかえすことはできないけれど、そのときの、差し迫った心情や情景は、まったく蘇つてこないんです。忘れてしまいたい、恥ずかしい失敗なんか、ありありと、思い出されてくることはあるのに（笑い）。記憶のメカニズムって、意地悪だな、なんて、思ったりもします（笑い）。私にとつて、とっても大事だった数々の出来事や、記憶で、あんなに、忘れるはずないつて、思っていたんですけど。それが、まあ、年月とともに、つていうことですよ、失われていくことに、ある時、気がついて、びっくりしたことがあります。

酒井

今、二十歳ぐらいとおっしゃったけど、青年期の終わりとともに、柔らかい心に刻み込まれた大切なものを忘れる、無くすというか、大切なものの色彩が色あせちゃうということでしょうか。

高野

齢を取るごとに、全部覚えていられない、記憶力の問題（笑い）も、もちろんあるんだろうと思いますけど。ただ、どんどん、新しい経験が、毎日毎日、増えていくわけで。生きて行く中で、忘れるっていうことも、前に向かつて、生きて行くための、必然なんだろうなって、私は、思うんです。忘れなければ、全部、覚えていたら、とても、人は生き続けることはできないんじゃないかって。大事なことから覚えているとか、覚えていたことは覚えているとか、引出しにしまったものを、いつでも、出し入れするような、そういう単純なものではないように、思います。

酒井

忘れるっていうことは、日常、現実を生き始めるということ、二十歳ぐらいって言いましてけど、たぶん、青年期というのを、大学の終りぐらいまでと、心理学ではとらえるらしいんですけど、……。

高野

そうですね。

酒井

青年期が終わって、大人になるという時期は、現実を生きるようになる時期で。それ以前の、青年期、……、思春期、青年期前期、後期、つまり、大学生の終わりぐらいまでっていうのは、現実から浮き上がって、まあ、空想というか、夢をみて生きているわけで、現実を、ある意味では、生きていかなかったのが、大人になった時、日常というか、現実を生き始めるということ、高野さんが言っていた、感動とか、決して忘れないだろうと思っていたような大切なものを、人間は忘れちゃうというか、持てなくなってしまうということですかね。

高野

感動を持ってないっていうよりは、その、あるものを、凄く大切だっと思った、という記憶はあるんだけど、なぜ、それを、自分が、それほどまでに、大切だと思っただのかという、そういう、熱というか、一途さというか、感情の高まりとか、そういうのは、刹那の、瞬間的なものであって、ずっと、忘れないでいられるとか、そういう種類の

ものではないのかもしれませんが。たとえ、覚えているとしても、それは、今の自分が、再構築した、「物語」としての記憶でしかないだろうと思うんです。そういう形でしか、記憶は、保存できないのではないのでしょうか。それから、あの、たとえば、中学から高校、高校から大学、社会人というふうに、環境が変わっていくときに、自分が所属していたクラスの仲間や、サークル、お世話になった先生なんかに対して、どこへ行っても決して忘れない、とか、いつまでも覚えている、とかっていう言い方すると思うんですけど。

酒井 うん、うん。

高野 でも、新しい環境で、新しい人間関係を築いていくときに、そういう、自分がとっても居心地がよかった場所とか、信頼した人とかを、忘れなければならぬ、過去へ、置いていかなければならないっていうのかな、そういうこともあると、私は思うんですね。忘れなければ、前へ進めないっていうか。忘れるはずないって思っていた記憶が薄れていくことも、それは、避けられない、当然のことなんじゃないかと、思うんです。今でも、若い友だちや知り合いに、何かのときに、今日の話は、絶対に忘れません、とか、一生貴方のことは覚えていきます、みたいな事を言ってもらえることもあるんですけど。それは、大変、嬉しいことではあるんですけど、でも、私は、「どうぞ、心配しないで、忘れてください。」って、言っておげなくなるんですよ（笑）。忘れちゃっても、まったく問題ないよって。

酒井 うん。

高野 その、私は、忘れないとか、覚えているっていうことを、必要以上に思いつめたり、重要視する必要はないって思うんです。確かに、その時、その時、気が通い合ったと実感できたり、共感したり、助けたり、支え合ったりした。そのことは、ほんとに、お互いにとって、忘れがたい経験であって。それに、間違いはないけれど、だからといって、それを、ずっと、忘れないで、覚えている必要があるかっていうと、それはそうではないだろうって、私は思います。

忘れるっていうことに、罪悪感を覚える必要もないですし。あの、過去の経験やその時の思いと、今の自分を、無理やり、すり合わせて、勘違いしてしまうこともあるんじゃないでしょうかね。勘違いっていうか、……、たしかに、いつまでも、自分のことを覚えていて欲しいという、気持ちは、他者の存在によって自己が存在しうるっていう、そういう、人間存在の根幹に（笑い）、堅くなりましたね（笑い）、……、まあ、関わることだろうし、また、覚えていたいっていうのは、なんていうか、そこに留まりたい、っていうような、変わっていくことを恐れるようなところもあるんじゃないかって、思います。記憶って、人と人、過去と今をつなぐものでもあるから、すごく、大切にされるのは、わかるんですけど、『ノルウェイの森』の直子のように、「私のこと、忘れないでね。」って、言われた「僕」が、直子のことを覚えていたって思っても、……

酒井 薄れていくって言ってね、……

高野 はい。薄れていってしまっ、って、……。

酒井 だからこそ、書き留めるんだってね。忘れるからこそ、人間はモニュメントを建てたりなんかして、……

高野 ええ。

酒井 忘れるっていうことが前提にあるんでしょうね。

高野 はい。

酒井 高野さんが言った、子どもの時、転校する時とか、子どもが「忘れないから。」って言っても、別の学校へ行ったら、いつのまにか忘れちゃうわけで。忘れたくないっていうのは、そういうのは、やっぱり、子ども性ということ、幼稚さというか。成長するときに、つまり、忘れるということは、……。太宰治が、『お伽草紙』の中の、「浦島さん」という作品で、玉手箱を開けたら、たちまち白髪のお爺さんになったというところに、独自の解釈をしていますよね。

「浦島は、立ち昇る煙それ自体で救われているのである。」として、「年月は、人間の救いである。」「忘却は、人間の救いである。」と書いています。忘却、……、時間というものが忘却をもたらすわけで、忘却というのは、人間にとって、恵みだということを言っていて、なかなか、深いことを、太宰も言っているわけだ。

高野 ええ。

酒井 僕らに忘却ということがなく、記憶がどんどん蓄積されていったら、いつパンクしちゃうかわからない。すごく苦しい、死にたいと思うほどに辛いと思っていたことがあっても、一週間も経ったら、忘れちゃっているということが多くて。時間が経過しないで、その苦しさ、辛さが、心に居座っているとしたら、生きていられないですからね。

高野 はい。

酒井 とここで、そうやって、どんなに感動して忘れたくないって思っても、人間は成長の過程で忘れるしかないんだけど、この主人公の始君は、小学校六年生の時の記憶を、忘れないばかりか、だんだん、リアルになっていくっていうのが、……。

高野 始の場合、忘れない、っていうのとは違うと思います。忘れないんじゃないかって、彼は、再生産しているだけで、……。

酒井 そのことを、そういう主人公のあり方を、結局、有紀子は、「私にも昔は夢のようなものがあつたし、幻想のようなものもあつたの。でもいつか、どこかでそういうものは消えてしまった」と、批判している、……。小学校六年生の時の島本さんの記憶、イメージというものは、普通だったら、時間の経過とともに、薄れ、消えていくはずなのに、益々、色濃く、鮮明なイメージ、幻想になってしまっていて、それから逃れられない。だからこそ、現実を生きない、現実が目が向かない。その始君のありかた、子ども性っていうのを、有紀子は批判している、っていう構造なんですかね？

高野 批判ではないと思いますけど。

酒井 していない、……。

高野 ただ、あなただけじゃないのよ、って、自分のことばかり、考えないでって、言いたいんじゃないでしょうか。始君の、自己愛、ナルシズムに対して。彼が、自分のことだけを考えていて、そこに浸っているのです。それは、酒井先生が、今、言われた、小学校六年生の時の記憶を、大事に大事に、物語にして、そして、あめ玉を舐めるみたいに、味わって、舐めつくすんじゃないくて、どんどん、大きく、肥大化していくっていう、そういう、始のありかたに対してですけど。だけど、有紀子は、始に向かって、「あなたがいつかもし私のところに戻ってきたら、自分がそれを結局受け入れるだろうと思っていたからなのよ。」って言いますよね。これは、有紀子の始への、愛っていうか、彼のことを失いたくないっていう思い、だと思うのです。だから、そういう、「昔のことを忘れない自分が好き」っていうような（笑い）、始君であっても、そういう始を、自分はやっぱり好きなんだ、愛しているんだって、有紀子はわかっているんだと思います。だから、「あなたは最低よ。」（笑い）って、否定しているのではないと思います。ただ、色んなものを失いながら生きているのは、自分も同じだって、始に言いたいし、始に、自分の方を向いて欲しい、自分のことをわかって欲しいという、気持ちですよ。始にとってみれば、「あ、そう。だから何？」っていう感じかもしれないですけど（笑い）。始が島本さんのことで、夢中というか、頭がいっぱいで、右往左往しているとき、有紀子は、死ぬほど傷付いていたんだけど、そういう有紀子の気持ちに、始は何にも気がついていなかった。有紀子が、ほんとに辛かったんだって、言いますよね。この言葉は、悲痛で、ほんとうに、胸に刺さるようです。ここに見える、その、二人の隔たりの大きさが、……。なんというか、有紀子の、悲しみの大きさと、それでも始を思う、その思いが、迫ってくるようで、……。どんなに辛くても、ここに、あなたの前に、私はいるのよって、有紀子は、始に、言い続けている

ように感じます。

酒井 ただ、有紀子は、夢のようなものを、殺してしまっただけで、って言っていて。

高野 ええ。

酒井 消え去った、ひとりでに消え去ったっていうことではなくて、有紀子は、たぶん、自分の意志で殺して、捨てたのだ、と言っていて。で、それは、あなたと出会う前のことだ、と言っている。有紀子は二十五歳くらいの時、始に出会っていますから、青年期の終わり、大人になる時に、夢のようなものを殺したということになりますね。夫が島本さんを追い掛けていることについて、有紀子は、私はあなたを責めているわけでもないし、怒っているわけでもないし、腹も立たないの、と言う。ただ、辛かったっていうふうには言っていて、男性の婚外性愛関係に寛容な妻になっていて……。

高野 はい。

酒井 このことは、男性ジェンダー、女性ジェンダーのところで考えると。

高野 ええ。

酒井 殺して、捨ててしまった、という有紀子の意志、……。大人になる時、青年期の終わりとともに、夢のようなもの、幻想のようなものは、捨てるべきものなのに、あなたは、今でもそういうものに囚われていて、現実を生きていないという、……。私は、批判という言葉を使っただけです。始君の、子ども性、自分と自分を取り巻く世界をroman化する少年性を有紀子は批判している。批判という言葉は、ちょっと考える余地があって、もつと適切な言葉があるかもしれないけど。

高野 はい。

酒井

批判ということは、ちよつと置いておいて、ここまでずつと、夫に従属する伝統的な妻役割を演じていたはずの有紀子が、ここで、ある意味、超越者になっていることが興味深いですね。上位にあるものの立場から、始君に教え諭している、という構造になっているような気がするんですけど、作品の結末は。

高野

ええ。私は、それが、……、その、後で、また、話に出ると思うんですけど、いわゆる、ジェンダー差異ということが、際立っているところだと思うんですね。確かに、有紀子は、強力（笑い）だし、超越者と言えると思うんですけど、そこで、女性ジェンダーが、男性ジェンダーの上位に立っているというのは、ちよつと違うって思いません。

酒井

うん。

高野

男性は、あの、いつまでたつても、少年っぽいとか、いい意味で言われて（笑い）、少年の夢を追いかけているとかっていうのが、許される社会にあつて、女性は、ここでは有紀子ですけど、そういうものは、自分で、殺して来た、捨てたわつて、言います。女性ジェンダーは、そうやって生きてきたし、生きて行く。その差違が、ここで、あらわにされているって、私は、思うんですけど。

酒井

今、高野さんが言ったことは、村上春樹が考える、男っていうもののあり方と、女っていうもののあり方という、その、男は成長できなくて、いつまでも子どもっぽくて、女性は成長するって、俗説によく言われる、そういう男女の差異を、書こうとしているのか、あくまでも、始と有紀子の個と個の問題として書いているのか、……

高野

そのように、書いているとは思いますが、そこに、その、先生がおっしゃった、ちよつとステレオタイプのな、ジェンダーの書き方かと思えます。

酒井

うん、うん。この作品は、主人公が三十歳の時、五歳年下の有紀子と結婚したつていう設定になつていて。しかし、

三十歳で結婚した始が、有紀子との結婚生活、家庭生活を語るっていうことは、ほとんどなくて……。

高野 はい。

酒井

島本さんが、三十六歳の終わりごろ、まあ三十七歳の時、始が経営する店にやって来るようになる。島本さんの出現と連動するかのように、にわかに、有紀子という妻の存在が始の語りにも浮上してくる。幻想のなかの存在であった島本さんが、現実世界に出現したことによって、結婚して、日常生活をともにしていたはずの妻のことが意識され、語り始めるっていうふうになっていて。つまり、幻想世界にいた島本さんが現実世界に侵入してくることによって、始の現実、意識から追放された影のようであった有紀子が存在を主張し始める。初めて、日常生活をともにする妻という存在感を獲得するわけですね。

高野 ええ。

酒井

影のように存在感の薄かった有紀子と、作品の結末の超越者のような有紀子とのギャップ。『国境の南、太陽の西』を読んでいて、ここは、すごく違和感があるところなんですけれども。有紀子が、作品の結末、特に、島本さんが、箱根の別荘で、忽然と消えてしまったあとで、急に、パワーアップする。この言葉は適切じゃないのかもしれない。が大変印象的な、繰り返しの言葉を有紀子が使いだしますね。「あなたには、きつとわからない」、「あなたには何もきつとわかっていないのよ」と、始が何もわかっていないこと、つまり、始に致命的な盲点があることを断言します。「奥さん、これ忘れ物ですよ」と並んで、私が問題にしたいのは、これも、有紀子が二度も繰り返す言葉ですけど、「そしてあなたは何も尋ねようとはしないのよ」、「あなたは私に向かってまだ何も尋ねてない」という台詞です。何も尋ねないと繰り返すことで、何を前景化させようとしているのか、その前段階として、始が有紀子に何を尋ねていないと言っているのかっていうのが、私には分からなくて。さらに、彼女は、もつと決定的な台詞も繰り返しますね。有

紀子の他に好きな女性がいることを始が認めた後で、私と別れたいの、っていう台詞も繰り返して、「もしあなたが私と別れたいのなら、べつに別れてもいいのよ。何も言わずに別れるわ。私と別れたい?」、「だから別れたいのなら、ただ別れたいって言って。私が知りたいのはそれだけなの。それ以外のことは何も聞きたくなんかない。イエスカノオかどちらか」というように。始が、「僕は君のことを愛しているよ」と言っても、そういう答えを聞いているんじゃないくて、あなたは私と別れたいの、どうなの、イエスカノオか、どっちかよって言いますね。最後通牒を突きつける、有無を言わせない言葉です。有紀子は決定的に重要な台詞を繰り返して始に突きつけますが、それは、レベルアップした有紀子と見るのが出来ます。先ほど、上位にあるもの、超越者という言葉の有紀子に当てはめたのですが、「忘れ物」ということの内実は、とりあえず、置いておくとして、尋ねようとしな、というの、どういうことなのか、ということを考えているのですが……。有紀子から、あなたは何も尋ねようとしな、と言われた始は、「たしかに僕は有紀子に何ひとつ尋ねようとはしなかつたのだ」と思うところがありますが、お互いに、何を尋ねない、何を尋ねるべきだ、と考えているのか。そのことが、どうもよく分からないので、結末の読みが定まりません。

高野 有紀子と始が、まったくかみ合っていない、すれ違っているっていうことを、……。あの、始は、その、かみ合っていないっていうことにすら、気がついていないっていうか、気にしていないっていうか、そういう、……。

酒井 うん。

高野 始は、自分がいい父親だったり、いい夫だったり、……。その、最後のところで、「役割を演じてきただけなのだろうか。」なんて、気がついた、っていうような感じで言っていて。今頃、そんなこと言っているのって（笑い）、私は思っちゃうんですけど。

酒井 ああ（笑い）。

高野 で、それが、有紀子をどんなに傷つけているだろうかって、……

酒井 うん。

高野 ここにきて、ようやくそれに気がついたっていうことで。

酒井 はい。

高野 表面的に、生活をうまく成り立たせるとか、家族関係がスムーズにいつているっていうことが、幸せと、イコールで繋がるって、本気で思っていたような、能天気さに、腹がたつんですね。確かに、食べるのに困らない、経済的に苦労しないだけで、幸せだって、言えるんですけど、始自身は、そういうところに、幸せの定義を求めているの、妻や子供は、それで幸せなんだって判断している。その傲慢さっていうか、自分勝手ってさっていうか。そういう暮らしの中で、有紀子は、本当に辛い思いをしていたし、ここにきて、島本さんのことがあつてからは、始は、心ここに在らずで、有紀子は、死にたくなるほど、悩んでいたたり苦しんでいたっていうことに、始は、まったく気がつかない。それなのに、出先から、家に一生懸命電話をかけて、「今から帰るよ。」とか（笑い）。アリバイ工作みたいなことを、必死にやったりする。そんなことには、頭を使って頑張るのに、有紀子の気持ちには、彼女が今、何を、どう、感じているのか、っていうことには、まったく頓着しない。私は、始が、かっこつけている分、滑稽にさえ感じます。

酒井 そのとき、始が傲慢というか、……。島本さんのことを、「君が考えているようなのは少し違うんだ」とか言つて。

高野 はい。

酒井 「私が何を考えているか、あなたには、おそらく、わからない、と思う」、「あなたには、きっとわからない」と反撃

されて、……

高野 ええ。

酒井 始は、なんだか、独り善がりで、島本さんとの関係性の内実は、君が考えるようなものじゃないんだよ、つて言つて。自分を特権化つていいのか、高みに置いて、有紀子には分からない、と言います。そこを有紀子から反撃されているわけですが。

高野 はい。

酒井 「ねえ、私だってそんな馬鹿じゃないのよ。私はあなたと一緒に暮らして、あなたと一緒に寝ているのよ。しばらく前からあなたに好きな女がいることくらいわかっていたわ」と言います。超越者だから見抜けたということではなく、現実を生きている生活者の現実感が備わっている女性だから、ということでしょうが。始が姑息なアリバイ工作をして、隠していたつもりでも、有紀子は明確に見抜いていて。それでいて、始を責めるわけでもなく、怒っているわけでもなく、「ただ辛いだけよ。ものすごく辛いだけよ。」と言いますね。

高野 ええ。

酒井 しかし、それでいて、有紀子は、子どもも、もうどうでもいいし、何度も本当に死のうと思った、あなたには何も分かっていない、と言つて、始の自己中心性を責めている、と思うのですが。

高野 そうですね。

酒井 あなたは何も尋ねようとはしない、とも言つて。

高野 はい。なおかつ、その、何も尋ねようとしなくていいのは、先生が、おっしゃったところの、「君の思っているようなものとは違うんだ。」という、言葉が象徴しているように、始の、独善性というか、有紀子の考えていることぐら

い、何でも分かっているっていうような、上から見下ろすような、思い込みに対して、……

酒井

君が考えているようなものじゃないんだ、って、あたかも有紀子が考えていることを分かっているように思っている。有紀子は、始に好きな人がいることぐらい分かっている、本当に死のうと思うほど辛かったのに、黙っていただけで。なぜかという、「私はあなたには十分な女ではなかった」ということが分かっていたからだ。このあたりの有紀子は、超越者の雰囲気を持っていきますね。十分な女じゃないから、「あなたはきつと私だけじゃ足りなかった」のだということが分かっていたから、だから、別れてもいいのよ、って言って。すごく、有紀子は分かっている女性なのに、始は、有紀子は分かっているじゃないって、……。だから、自分に起こっていることを有紀子にしゃべっちゃうと、すべて壊しちゃうとか、話すべきだろうけど、話してしまうと、何もかも壊してしまうから、黙っているんだ。それが責任だ、みたいな感じで。

高野

そうです。

酒井

すごく、独り善がりで、……。そこを、有紀子が、「あなたには何もきつとわかってないのよ」って言っていて。これは、まあ、批判、非難しているとして。もう一度、「あなたは何も尋ねようとはしないのよ」に戻りたいんですけども。見当違いかも知れないけれども、私は、島本さんとの関係が抜き差しならぬものになったところから、これは繋がっているように思っています。何も尋ねようとはしない、と有紀子が言うのは、作品の結末ですが、今、私が言っているのは、作品が半分ほど進んだあたりのところのことです。島本さんから、「あなたどこか川を知らない？」って尋ねられて、始が、そういうえば、石川県にそういう川があったって言って。それで、真冬の東京湾で、スイミング・クラブの仲間とヨットで遊ぶんだって、見え透いた嘘を有紀子について、島本さんと石川県に行っちゃう。小学校のとき、「十秒程度」、島本さんと手を取り合っていたことはあったけれど、石川県に行った日、小学校の時代以来となる、身

体的接触があつて……。水を口移しに吞ませるとか、肩を抱いて、彼女の頬に頬をつけるとか、といった接触。始にしてみれば、初めて、意識的にと言いますか、本当の意味でと言いますか、島本さんの身体に触れたわけですね。始のなかでは、島本さんとの関係に地殻変動が生じ、島本さんの存在が始の意識の大半を占めるようになります。島本さんとの関係が抜き差しならぬものになった「四日後」に、有紀子の父親に呼び出される、というストーリーが仕組まれていますね。

高野 はい。

酒井 義父の話の要点は、トンネル会社の名義人になってくれ、っていう依頼と、有紀子の自殺未遂の話だと思います。石川県での出来事との関連で、重要なのは無論後者ですね。男の三十七歳といえば、遊びたい盛りで、仕事が出来る男には、女がいくらでも寄ってくる、適当に遊んだほうがいいくらいだが、でも、あまりいい女と遊ぶなよ、あまりいい女と関わると、元に戻れなくなるから、とアドバイスします。始と島本さんとの関係性の進展を察知したとか考えられない発言で、ちよつと不自然なところですが。とにかく、このような話の後で、義父は、「そろそろもう知っておいたほうがいいと思うんだ」と言つて、有紀子が「一度自殺しかけたことがある」という秘密を話しますね。有紀子の自殺未遂は、大学を出てすぐの二十二歳のころでしたっけ？

高野 はい、そうですね。

酒井 有紀子の自殺未遂、「原因は男のことだ」と義父は打ち明けます。婚約までしていた男、それが「つまらん男」で、有紀子の「ショックが大きかったんだよ」と……。「病院に担ぎ込まれて二日間意識が戻らなかった」、「これはもう確実に死ぬと思つたよ」というほどの自殺未遂であつたと義父は言うのですね。

高野 ええ。

酒井

義父と別れた後、始は、有紀子のいる家庭に帰るのですが、彼女は、義父と始がどんな話をしたのか聞きたがるのですね。「たいした話なんて何もなかったんだよ」と答えますが、それは、嘘と言うべきか、ごまかしと言うべきか、いずれにしろ、有紀子にきちんと向き合おうとしない態度だと言う他ないですね。トンネル会社の話も、自殺未遂の話もしないのです。前者に関しては、「それを知ったら、父親が僕に迷惑をかけたことで彼女はきつと嫌な気持ちになるだろうと思ったからだ」と、話さない理由を語っていますが、後者に関しては、話さない理由を語っていません。それを心で咀嚼するひまもないまま、有紀子を抱くわけです。しかし、それは、有紀子を愛する行為というわけでもなさそうですね。自殺未遂するほどの辛かった恋の痛みに共振する思いやりとしての性愛行為ではないようです。「僕は時間をかけて彼女の体を温めてから中に入った。でもその日、僕は彼女の中に入りながら、ずっと島本さんのことを考えていた。僕は目を閉じて、今自分は島本さんを抱いているのだと思った。自分は今島本さんの中に入っているのだと想像した。そして僕は激しく射精した」。この一連の始の心の動きと行為の意味がよく分からないのです。もっと分からないのが、有紀子の胸中です。有紀子は、抱かれた後、始の心の中に生じている何かを察知したかのごとく、わざわざ、「ねえ、あなたのことが本当に好きよ」と言います。始は、この有紀子の愛情表現に誘われるかのように、この後もう一度、有紀子とセックスするのですが、有紀子がなぜ、始に対する愛情をこの局面で言語化したのか、その理由がよく分からないのです。よく分からないのですが、この言語化（もっと広く考えて、この日の出来事、と言うべきかも知れませんが）と、作品の結末の、「あなたは何も尋ねようとはしないのよ」という発語とは繋がっているように思えます。何も尋ねない、と発語することで、有紀子は何を問題にしているのですかね？

高野

有紀子の自殺未遂の話っていうのは、この始君と、島本さんのことがあったときに、有紀子が、「私は死のうと思つた。」って言いますよね。私は、そこに、繋がってきていると思つています。

酒井 ああ。

高野 有紀子を、かつて、死ぬほど傷つけた、「くだらない男」って、義父に言われる男が、……

酒井 「つまらん男」、ね。

高野 はい、そうですね、つまらない男。その男に、始君が重なって。

酒井 重なっちゃいますよね。

高野 男、男たち、男性ジェンダーというくくりで、まったく同じものになっていると思います。でも、ここで、有紀子は、「私は死ななかつた。」って、始に言つて。「あなたが帰ってきてくれたら、私はあなたを許すから。」って、……

酒井 許す、とまでは言っていないくて、受け入れる、という言い方をしていますよね。まあ、同じことでしょうか。

高野 有紀子は、二十二歳のときの有紀子ではない、っていうことを、はっきりと宣言しているんですよね、ここで。そのうえで、「あなたはどなの？」って、始君に、「私と別れたいの？」って聞いていて、……

酒井 ああ。

高野 夫である始が、自分のことを、好きかどうかなんて、そういう、心情的な、情緒的な、一瞬一瞬で、どうとでも変わっていくようなことを、言っているのではない、って、有紀子は、言っているのだと思います。現実には、今、目の前にいる、生身の人間の、妻である有紀子と、別れるのか別れないのか、って聞いているんだって。とてもシビアで、取り返しのつかないことで、……、なんていうか、決断ですよ。どっちも選ぶなんてできない、選んだら引き返せない、選択というものを、突きつけているのだと思います。「あなたは、何も尋ねようとしなない。」っていうのも、先生がおっしゃるような、有紀子の過去についても、そうですね、何でもわかっているというような、自己完結してしまっている始に、有紀子は、……

酒井

これを現実の出来事として考えるならば、有紀子の父親が始を呼び出して、何を話したかったということは、現実の人間である私たちには、分からないわけですが、これは小説ですからね。小説には作者がいて、書いているわけだから、先ほど問題にしたストーリーで、石川県に始と島本さんとで行き、そこで、始にとつては、ある意味で決定的な関係性が生じる、島本さんとの身体的接触という、決定的な接近があつて、で、その四日後に、義父が始を呼び出して、深刻な話をするという仕掛けを春樹が仕組んでいるのですが、なぜ、義父は取つて付けたように、深刻な話をしたのか、ということを考えなくてはならないでしょう。

高野 ええ。

酒井

小説という作者が書いて、仕組んでいるものとして考えれば、石川県で、島本さんと始に何かあつたつてというのが、義父には分かっていたからこそ、あまりいい女と遊ぶと元に戻れなくなるから、男は適当に遊ぶ必要があるけど、あまりいい女と遊ぶな、と忠告したと考えるべきだと思うのです。現実世界のことであるなら、石川県で、島本さんと始に何かあつたかなんて義父が知るはずもないし、そもそも、二人が有紀子に秘密で石川県に行ったことすら知りようもないのですが。自分の自殺未遂のことを、父親が始に言ったことを、知っているからこそ、「あなたのことが本当に好きよ」と言語化したというふうに、小説としては読みたくなくなるんですけど。かといって、ここで、二十二歳のころの自殺未遂の話を、お父さんから聞いたんだけど、言つて、どういうことだったのだ、つて有紀子に聞いたとすると、過酷な問い掛けになるので、有紀子へのいたわりの心から聞かなかつた、と一応考えられますが、春樹は、始の行為をそのようなものとしては書いていないと思うのです。と言いますのは、有紀子を抱きながら、始は、島本さんのことを考えていて、自分は島本さんの中に入っているのだ、と想像しているからです。直前に義父から聞いたことが、始の心を素通りしているのでしょうか？ 四日前の石川県での身体的接触を再確認するために有紀子を抱い

ているようにも読めます。つまり、自殺未遂に繋がる恋愛の辛さの詳細を尋ねないのは、妻への愛情からではなく、始は、非常に自己中心的になっているのであり、四日前の島本さんのイメージを呼び戻そうとしているのだと思います。

高野 はい。

酒井 それぐらいなら、むしろ、聞いてくれたほうが楽になるのではないのでしょうか？ 有紀子は聞いて欲しいんじゃないの？

高野 ああ（笑い）。まあ、直接、聞かないにしても、ちょっと、態度や様子がおかしくて、有紀子が変わなって気がつくとかは、ありそうですね（笑い）。お父さんが、どんな話をしたのか、有紀子が始に根掘り葉掘り聞くとか。お父さんに電話して、始に何を言ったのか聞くとか、まあ、現実だったら、そういうような感じでしょうか。始が、有紀子の過去に、そんなことがあったのかって、ショックを受けて、かわいそうな有紀子って思ったのは、それはそうだと思います。でも、それが、すぐに、島本さんに重なっていつてしまいうんですね。始にとっては、傷ついても、た女性は、島本さんであり、自分が慰める、愛してあげる、守ってあげる対象は、島本さんしかないって、自動的に、始君の中では変換されてしまう。「あなたは何も尋ねようとはしないのよ。」っていう、有紀子の言葉は、始の、有紀子に対する、徹底した無関心に対してではないでしょうか。

酒井 うん、うん。

高野 わかった気になっているというか、どうでもいいというか、……。そういう、始君の振る舞いは、思いやりがあるようでいて、実は非常に冷たいと思います。無関心ということは、嫌悪の情すらもつこともない、だから、いいんじゃない、っていうことです。そういう始の、有紀子への、向き合い方に対して、有紀子は、はっきり、びしっと（笑

い、「そこが嫌なの。」って、「許せない」って、言っているような気がします。

酒井 お父さんから聞いた、二十二歳ぐらいのときの恋愛沙汰、男関係に限定して、有紀子は、何も尋ねないと言っているのではなく、死に飛び込むほど辛かったその頃の思いの数々、青年期の複雑な思い、その中心には、「つまらん男」との関わりがあったにしても、始は無関心のように……。

高野 ええ。

酒井 有紀子が死のうとしたほど、ショックを受け、傷ついた出来事を義父から聞いていながら、島本さんのことを考えながら有紀子とセックスする始。有紀子が、「何度も本当に死のう」と思うほどに苦しんでいることにまったく気づくこともなく、「非のうちどころのない幸せな家庭を維持していた。僕は妻と二人の娘を愛していた。」と自己満足に耽っているのですね。有紀子は、何度も死のうと思っていた、孤独で寂しかった、子どものことさえ考えなかった、と言いますが、そのような有紀子の心の中を全く見ようともしないで、島本さんの幻想だけを自閉症的に追い求めているわけです。今、現在の心の動きも、ひつくるめて、「何も尋ねようとしなない」って言っているのです、何も、結婚する前の自殺未遂に至る経緯を追及しない、っていうことではなくて、……。でも、始が義父に会った日のことに限定して考えてみても、何ひとつ聞かれないよりは、……。不自然な欲情を發揮してセックスする、優しさ、だか、自己愛だか、を示されるよりは、辛いことかもしれないけど、尋ねてもらったほうが、いいんじゃないかと、……

高野 そうかもしれないですね。態度が変わったりして、二人の間に、波風がたつわけですから。

酒井 そこから、関係性が発展するということもありえるのに。

高野 はい。

酒井 それなのに、有紀子の過去の苦しみを中心の中を素通りさせて、四日前に触れた島本さんのことを考えながら、有紀

子の身体に分け入っていく、という自己中心性。尋ねられて、辛い思いをする、というのは耐えられることでしょうが、存在を無視されたことになるわけですからね。

高野 始君が、言うのは、「自分には、その資格がない。」とか、「自分は、ろくでもない男だ。」とかっていうことばかりで。自分は、自分は、って、こう、……

酒井 ええ。

高野 それに対して、有紀子は、「資格なんてどうでもいいのよ。」って、言い切るわけです。

酒井 そうですね。

高野 はつきり、二人の違いが、すれ違いの方が、出ていますよね、ここでは。先生が、おっしゃる「あなたは尋ねようとしていない。」っていう、有紀子が繰り返す、言葉に、有紀子の、怒りというか、叫びというか、そういうものが、込められているんでしょうね。始君の、肩をつかんで、揺さぶって、こっちを見て、って、言いたい、そういう、有紀子の思いみたいなものを、感じます。

酒井 そこを、春樹が、わかって書いているのなら、凄い作家だなんて思うんだけど。

高野 はい（笑い）。

酒井 最初、言ったように、始が三十歳で、有紀子が二十五歳のとき結婚して……。島本さんが現れる、三十六とか三十七までの、六年間ぐらいの夫婦生活があるわけだけど、ほとんど、有紀子は語られもしないっていう。

高野 そうですね。

酒井 島本さんが現れるようになってから、その対比で、有紀子を欠如体、つまり、「十分な女」ではないパートナーとして意識しだした、と言えると思います。「非のうちどころのない家庭」を築いていて、何ひとつ不満のないパートナー

だと思っていたと言っていますが、まあ、影のように存在感がないわけ。それが、作品の結末で、始を教え諭すような女性になっていて。始の子ども性、自己中心性を浮き彫りにするように、春樹が、仕組んで書いているのか、……。

高野 うーん、……

酒井 わかって書いているのか、どうか、っていうのは、ちょっと、問題がありませんね。

高野 箱根で、島本さんが消えて、その後、イズミの亡霊みたいなのに、会っちゃって、……

酒井 ええ。

高野 で、呆然として、そこで、小説が終わる、っていうのと、ここで、有紀子が、「私はあなたの手を離さない。」って言うって終わる、のとは、ずいぶん、違いますよね。

酒井 うん、うん。

高野 未来への、希望といえますか（笑い）。

酒井 そうだね。

高野 未来がある、先に進んでいく、っていう兆しが、この小説の最後の場面にはあると思います。春樹の作品らしいっていうか（笑い）。私は、いつも、春樹の作品を読むと、思うんですけど、そういう、再生とか、乗り越えとかいう、その役目を、春樹は、女性に託すんですね。男同士の話をしていたのに、そういう役割は、女性なんだなって、感じる人が多いです。この小説でも、最終の場面が、必要だったんでしょね。

酒井 ところで、我々は成長するとき、大人になるとき、夢のようなもの、少年が追い求める夢のようなものを捨て去ることによって、成長すると、……。有紀子は、青年期の終わりに捨てた、夢のようなもの、幻想のようなものに、夢の中でも追いかけられている、誰かが、その捨てたものを両手に抱えてきて、「奥さん、これ忘れ物ですよ」って。始

は、それを捨てていない。だから、始の子ども性っていうのか、少年性っていうものを批判させているのかも知れません。江藤淳さんが、有名な『成熟と喪失』という本で、成熟するということは、何かを獲得することではなくて、喪失を確認することだ、って言っているように、……。確かに、大人になるとき、私たちも、夢といったような多くのものを捨てるわけですね、なくなっちゃうだけでも知れませんが。そのことに關して、ひとつ考えたいのは、始が、義父にお金を借りて店を出して、株式操作でも、義父の言うとおりにして、結構儲けていながら、そういう生き方は、自分の本当の生き方じゃない、本当の自分じゃない、そんなことをしててもいいんだらうか、って考える、三十六歳にもなる大人がですね、……。

高野 はい。

酒井 汗水たらして働く、それが、本来的な生き方なのに、自分はいったい何をしているんだらう、こんな自分は本当の自分だらうかって、いう疑問を抱いているのは、振り返れば、大学生であったとき、政治闘争、学園闘争を経験していて、資本主義の論理に対してノオを突きつける心性を持っていたからです。青年期以前に持っていた「夢のようなもの」、「幻想のようなもの」を捨てないことを、今まで、否定的に見てきましたが、別の観点に立つ必要もありますね。「戦後の一時期に存在した理想主義を呑み込んで貪っていくより高度な、より複雑でより洗練された資本主義の論理に対して唱えられたノオ」の心性・思想、始は、それを失わないでいる、と見る視点も必要だと思います。青年期に持っていた純粹な理想主義精神を失うまいとする、浮薄な資本主義社会に流されまいとする始は、やっぱり、ある意味、評価できる人間とも言えると思います。と言いますか、始の唯一の美質かも知れません。大人になっても、捨てるべきではない青年期の理想主義・夢、それを投げ捨ててしまったら、義父のような人間になるのではないでしょうか。まあ、義父は特に悪い人間として描かれているわけではありません。高度な資本主義社会の中を要領よく生き

ていく人間というだけです。政治闘争、学園闘争を生起させた理想主義的な思想は無くさないほうが良いとは思いませんか？

高野 無くさないほうが、良いというか、……。

酒井 高校生のとき付き合っていたイズミが、高校のある町に留まることを強く望んでいたにもかかわらず、どうしても東京へ行きたい、と切望したのは、学生運動の熱気に直に触れてみたいという思いがあったからですね。「世界が目の前で大きく変貌しようとしていた」その「発熱」を肌で感じたかったですね。まあ、結局は、失望しちゃうんですけど。

高野 ええ。

酒井 東京の学生たちの運動に参加しなければ自分の中で失われてしまうと始が感じたものについて、彼自身で、「それは茫漠とした夢のようなものだった。そこにはほてりがあり、疼きがあった。それは人が、おそらく十代の後半の限られた時期にしか抱くことのできない種類の夢だった」と語っています。それは、イズミには理解することのできない夢だった、と言っていて、小市民の安定した生活を求める心性とは異なるものであり、現実社会に屹立し、既成の価値観、権力に対峙し、現実社会の諸々の矛盾に立ち向かおうとする理想主義的精神……。

高野 はい。

酒井 十代の後半に始が持っていたと言っている「夢のようなもの」と、有紀子が大人になる前に、意識的に捨て去ったと言っている「夢のようなもの」、「幻想のようなもの」とは、同じものなのか、違うものなのか？ 同じものだとしますと、それを捨てた有紀子と、持ち続けている始という対比になり、青年期の理想主義的精神を持ち続けている始のほうが、真摯に生きている人間のように見えますが、しかし、作品の終局での有紀子には、超越性が与えられてい

て、有紀子のほうが、成熟した人間として描かれているようにも思えて、……

高野

あの、今の、団塊の世代って言われる人たちとか、メディアの中で、評論している人たちで、そういう、学生運動を経験して、超えてきた人たちには、共通の匂いみたいなものが、あるなって、私は感じるんですけど。やっぱり、この、始君も、なんていうか、刻印を押された、つていうのか、……

酒井

うん。

高野

マルクス、レーニン思想に触れて、資本主義は悪であり、打倒すべきものだったという意識とか、あと、平等とか、平和とか、そういう、大所高所から、社会を見て、社会を変えたい、社会を良くしたい、つて思った世代には、強烈な、なんていうのかな、もう、決して取れない印みたいなものが、押されてしまっているように感じます。いいとか悪いとかではなくて。ただ、私が、イライラするのは（笑い）、始君が、中途半端だなんて思うんですよね。そういう経験を、自己存在の基盤に置いているようにいて、でも、実際にやっていることは、義父のお金で、なんとなくお店やってみたら、うまくいっちゃって、「あれ、僕って才能あるんだ！」つていう感じじゃないですか。

酒井

ああ（笑い）。

高野

で、そうなたらなつたで、開き直つて、義父ジュニアになるわけじゃないんですよね。自分に対して、やましさを感じている。それでも、また、二軒目の店を出す。それも、繁盛して、人気がでちゃつて、おしゃれなお店で、雑誌にまで取り上げられて。そして、また、成功したらしたで、それに対して、違和感を持つとか、自分じゃないみたいだつて、罪悪感持ったり、アイデンティティの危機に陥つたりする。もう、そういうの、とつても子供っぽいつて思います。いい加減にしてつて、言いたくなるんです（笑い）。

酒井

子どもっぽいつていうのは、……。たとえば、学生運動してつて、長髪で、ジーンズ穿いていたのが、急に、短く

髪を切って、ネクタイして、スーツ着て、就職活動して、普通の会社に就職した人が多かったわけですが、変節しないで、ブルーカラーの生き方を選んだ人もいたのですね。始は、学生運動から早々と降りていたからでもあったでしょうが、さつさと、教科書を編集・出版する会社に就職したのですよね。

高野 はい。

酒井 「髪を短く切って、革靴を履き、スーツを着た」と語っていますが、資本主義社会への溶け込みもスムーズであり、ちゃっかりしていますね。現実社会への適応能力があるのですよ。でも、有紀子と結婚した後、教科書会社を辞めて、……。しかし、その選択は、ホワイトカラーであることの自己否定からではなく、金持ちの義父の言いなりで、バーを経営し、株操作して、莫大なお金を手に入れちゃう。

高野 ええ。

酒井 そうしておきながら、一方で、……

高野 こんな、本当の僕じゃない、とかつて、……

酒井 そう、そういう人生に違和感を抱いたとか、本当の自分じゃないみたいだって、ね。

高野 もし、本当に、そう感じているなら、妻であり、義父との間をつなぐ存在である有紀子に、ぶちまければいいと思
うんです。たとえば、「僕、こんなの、嫌なんだ」とか、「自分が自分じゃないみたいで辛い」とかつて。うまく伝わら
なかるうが、わかってもらえなかるうが、とにかく話して、喧嘩したり、ぶつかったりする。それで、苦しくなつて
も、……。そういうことをしないで、何となく、自分じゃないみたいだとか、こんな自分でもいいのかなあとかつて、
自分一人で、考えにふけっただけっていうのは、ほんと、かつこ悪いと思います。結局、僕は、僕は、つて、一
人で、自分のことばかり考えているだけで。そういう始に対して、有紀子は、一人で、ぐるぐると、同じところを

回っていないで、私に聞きなさいよ、尋ねなさいよって、言いたいんだと思うんですよ。ですから、若いころの、理想主義の埋み火、残り火みたいなものを、始が、持ち続けていることに關して、有紀子は、批判的なわけではなくて、始が、ちゃっかりと、上手に、世渡りして、世の中の、日の当たるところを、歩いているにも關わらず、そういう自分を、受け入れがたくて、違和感だのなんだのって言って、興味があるのは自分だけで、そこに浸って陶醉している、そういう始に、自分の方を、言い換えれば、他者や、現実の生活ということでしょうが、見て欲しいって思っているんだと思います。

酒井 始が結婚生活の中で、有紀子にぶつかり、自分の主張を通そうとしたのは、ただ一回あるだけで、それは、有紀子がお父さんから絶対に儲かる株があるから買えと言われて、始に相談しないで、八〇〇万円くらい株を買ったとき、かなり強い口調で、その株をすぐに全部売り払ってくれ、と言います。自分は株でなんか儲けたくない、こういう人生はもう嫌になつてきたのだ、と言い、損してもいいから、全部、解約しろ、って。

高野 はい。

酒井 初めて有紀子に、自分というものをぶつけた、……

高野 そうです。

酒井 有紀子に対して自己主張したとき、つまり、学生時代に戻つたみたいいな人生観を吐露したとき、っていうのは、そのように振る舞うべき理由が何かあったからっていうわけではなく……。始が、青年期の理想主義的精神を失っていないから言った、というようには読めないですね。有紀子にしてみれば、朝の始と昼の始がまったくの別人みたいで、今までと同じことをしたただけなのに、訳も分からず怒られているみたいな感じで、……

高野 ええ。突然、……

酒井 責めているわけじゃないんだ、怒っているわけじゃないんだって、言われても、……。有紀子は自分の非に思いを廻らせるしかなく、何か不満があるのなら言っただけでいい、と夫をサポートする妻役を演じるしかないのです。しかし、始は、その日のうちに、箱根の別荘に、島本さんと行くという、ストーリーになるので。

高野 はい、そうです。

酒井 始は有紀子を裏切るような行動に走るのに、なぜ、あそこで、突如、有紀子を責めることができるのか？ 有紀子にしてみれば、今まで、お父さんが言うようにして、反対したことなどなかったのに、今日はどうなっているのだろうか？ と、訳が分からないですよ。

高野 ええ。

酒井 何故、自分が責められているのか、分からないでしょうね。半日で理解不可能な別人になっているのですからね。

高野 そうですよ。

酒井 何か理由があつて、始は、株で儲けるような人生が嫌になつたつて言うんですか？

高野 もう、こんな生活は続けていくことはできないつて、言うところですよ。

酒井 それは、島本さんの幻想を求めつて、有紀子との家庭生活を続けていくことが、もうできなくなつたつていうこと？

高野 はい、そうです。

酒井 ということは、「十代の後半の限られた時期にしか抱くことのできない種類の夢」へのこだわりで言っているんじゃない、二重生活、家庭生活と婚外恋愛との間の板挟みに耐えられなくなった苛立ち、辛さをごまかすために、株で儲けるのは嫌だつていう、十代の理想主義のような論理で、……

高野 株で儲ける、つていうことが、始にとつて、今の、現実の生活の中の自分自身を表して、それは、島本さんと

再会することで、直面した、始にとつては、受け入れがたい自分の姿なんじゃないでしょうか。そして、それは、有紀子と繋がっている。現実というものは、生活というものには、お金が必要だし、自分もそこでちゃんとやっているのに、有紀子こそが、義父と自分を結び付け、お金や株操作みたいなものと、自分を繋いでいるっていうふうには、感じているように思います。男性ジェンダーの女性嫌悪って、こういうところに現れますよね。男性ジェンダーにとつて、女というのは、そういう、自分を墮落させる（笑い）厭うべき存在でもあるっていう。そういう意味で、始にとつて、有紀子が、そっち側の、あの、現実の、金儲けとか、資本主義とか、と、自分を、繋げる、入り口っていうか、象徴っていうか、そういうものに思える。反対に、島本さんは、甘い、過去の、懐かしい、自分が自分でいられた、そういう存在である。始自身が、有紀子との生活、自分の現実からの逃避する場所として、生み出したのが島本さんだろうと、私は、思っているんですけど。だから、始は、有紀子と島本さん、二人に手を引かれて引き裂かれるような状況にある。それは、自ら、そういう状況を招いているんだけど、自分としては、一応苦悩していて、辛いわけですから、被害者的感覚でもいると思います。そういう中で、始は、このとき、有紀子から、株やお金の話があったとき、平穏な日常をとりつくりついていた意志と、感情が、平衡がとれなくなつて、はじめて、始は、そんなお金は嫌だ、つて、言えた、言つてしまつたんじゃないでしょうか。だから、有紀子は、びっくりしたと思いますよ。そんなこと、今まで、始が匂わせたこともなかったでしょうから。え、いったい、何がいけなかったの？ つて、聞きますものね。

酒井 そうだね。

高野 だから、もつと、早く、青山に二軒も店を持つ前に、箱根に別荘を買つたり、BMW乗つたりするようになる前に、
「僕ってこれでいいのかな？」 つて、有紀子に言えばよかつたのに、……

酒井 ああ（笑い）。

高野 そう言われれば、有紀子も、びっくりはするだろうけど、始の気持ちを理解しようって思うだろうし、まあ、慰めたり、怒ったりもするだろうけど。でも、そこから、二人の関係が、築かれていったでしょうし。始は、自分の、心の中の、揺れや、わだかまりを、ずっと、自分だけのものにしておいて、ここで、島本さんが登場してきて、はじめて、有紀子へ向かったわけですから。有紀子にしたら、いきなり、何言い出すの？ って、なるのは、当然だと思えます。私は、島本さんが、現実の存在にしろ、幻想にしろ、登場してきたのは、その、始君が、四十歳を目前にして、(笑い) ……

酒井 三十七だからね(笑い)。

高野 今まで、何となく、折り合いをつけてきた現実と、ここで、はっきり、向き合わなければならぬ時を迎えたからだろう思います。それに対して、嫌だよ、怖いよ、って駄々をこねている(笑い)。

酒井 はい、はい(笑い)。

高野 本当の自分と向き合わなければならぬという、始君にとっては、危機的な状況で、その逃げ場として、ぬくぬくと、温かい、幻想、記憶の中に、島本さんを、呼び出したんだろうと思うんですね。そこで、二つに、引き裂かれるような、思いをする。始は、現実には、生きて、生活して、生身の存在として、いるわけですから。それは、そうなりますし、痛みをともなつたと思います。

酒井 そろそろ、この章を、終わらなければならぬんですけど、考えてみれば、始は、青山の二軒の店で、あの、アルマーニだの、なんだの、スーツ着て、……

高野 はい(笑い)。

酒井 こういう服を着て来て欲しい、お客さんには、こうあってもらいたいというのがあって。だから、アルマーニ、

着ていて。

高野 そうですね。

酒井 島本さんは、一目でわかる、高級な服を着ていて。

高野 はい、シックで。

酒井 そう、シックだね。そういうものが、箱根で一夜明けたら、全部何にもないみたいなどんでん返しみたいのがあって。さっき、高野さんが言っていた、外苑東通りで、イズミの顔のない顔に触れた、っていうところで、作品を終えるっていう手もあるっていうか。余韻があつて、いいように感じるけど。でも、春樹は、もう一遍、有紀子との会話を書いて、明日から、また始めよう、みたいな感じで。主人公が、子どもたちをそろそろ起こしにいかなくっちゃ、と思つて。でも、最後、また、春樹らしく、……

高野 はい。

酒井 でも、全身から力が失われて、どうしても立ち上がれなくなっちゃうところ。

高野 ええ。

酒井 さて、どうなるんだらうって、謎を残しますね。箱根では、島本さんが、明日になったら、何もかも話してあげる、って言いながら、朝になったらいなくなつていて、『国境の南、太陽の西』の結末でも、「明日からもう一度新しい生活を始めたい」と言う始に対して、「それがいいと思う」と応える有紀子を描いておきながら、始は朝が来ると、動けなくなり、有紀子との関係性の変化は何も書かれないままです。「誰かがやつてきて、背中にとつと手を置く」と、ミステリアスな描き方をしています。明るい未来が開けている終わり方か、ちよつと、疑問が残る、終わり方ですね。高野 はい。ここは、完全に、島本さんとの箱根の一夜と次の日の朝を、なぞっていますよね。重ね合わせていると思う

ので、やっぱり、明日なんか無い、って、……

酒井 明日は、無いって、読めるよね。

高野 ええ。

酒井 春樹は、ちょっと漱石に似ていて、作品の最後に、一筋の希望を持たせる終わり方をする作家だと思うのですが、……。明けない夜はない、っていうように、背中に手を置いた誰かとの新しい関係性が始まるのか、あるいは、怖いけれども、明けない夜もある、っていう作品なのかもしれないね。

高野 だから、太陽の西、なんでしょうか。

酒井 ああ。太陽の西、ね。